

ドクターストップ

文 伊藤公一

text by Kouichi Ito

主治医として担当患者に対し、それぞれの病状に応じ就労許可や運動禁止、渡航制限など、個人のライフワークに許可や制限を下す場面に、しばしば遭遇する。それら「ドクターストップ」は、医師の特権と言える。

そこでジャッジが甘すぎたため、病気や怪我が悪化したのであれば、当然に大問題であるが、一方、見立ての厳しすぎで行動制限を言い渡した場合は、そのレフェリーの成否は分ならず、医師に責任が問われることはない。

よって「無理をしない」「念のため」と、やや心配し過ぎたほうが医師の振る舞いとしては無難であろうが、自身の診断治療に自信を持ちつつ、真剣勝負に挑む人に「ゴーサイン」を出すほうが難しくも達成感のある仕事である。

とはいえ、難しいドクターストップも存在する。それは、86歳で南米最高峰アコンカグア登頂を目指した三浦雄一郎さんに同行し、山の上で「自信はある」と言う本人に不整脈が出現したことより、「生きて帰るために」と泣いて下山を促した大城和恵医師の決断で

ある。

普通に考えれば無謀な挑戦であろうが、鉄人ゆえに周到な準備を重ねてきたはずだ。そして現在までの三浦氏の実績を鑑みれば、誰もが成功を予測していたことに違いない登頂である。

そこで苦難の末、勇気を持って決断した主治医の言葉に素直に従ったベテラン冒険家。大変な葛藤、やり取りがあったのであろうが、命懸けで挑んだ偉業の中断。これこそ医師と患者の大きな信頼関係が無ければ、成し得なかった究極のドクターストップと言える。

こちらも最近のニュースである。弱冠18歳で、来年の東京オリンピックで金メダルの有力候補と期待される池江璃花子選手が白血病を患っていることを公表し、闘病生活に入った。

血液疾患の診療進歩は著しく、白血病も、もはや不治の病ではなくなった。そこで池江選手の1日も早い回復を祈るばかりであるが、今は水泳どころではない状況であろう。よって、療養中の運動制限などのドクターストップに異論を挟む者はいない。

医師の腕の見せどころは完治をした

後である。天才スイマーが再びメダルを目指し、表舞台のレーンに上がるまでの主治医の段階的なゴーサインのほが、しばらくのドクターストップと比較して、はるかに難しい仕事であろう。

Profile

1958年生まれ。伊藤病院3代目院長。北里大学医学部卒業、東京女子医科大学大学院修了。医師になって以来、国内外にて一貫してバセドウ病、橋本病、甲状腺癌など甲状腺疾患に対する診療と研究にひたすら従事。東京女子医大、筑波大大学院非常勤講師。日本医科大学、了徳寺大学客員教授。日本内分泌外科学会、日本甲状腺外科学会理事。厚生労働省診断群分類調査研究班班長。伊藤病院 <http://www.ito-hospital.jp/> 名古屋甲状腺診療所（名古屋分院） <http://www.kojin-kai.jp/nagoya/> さっぽろ甲状腺診療所（札幌分院） <http://www.kojin-kai.jp/sapporo/>

